森の自由人 129

狸泥舟

富士塚めぐり

1 日 4,000 歩以上歩くといいということで、孫にもらった万歩計をズボンのポケットに突っ込んで、5,000 歩を目標に散歩に勤しんでいる。ただ歩くだけでは面白くないので、近隣の名所・公園などを目標にしている。

正月と言えば縁起の良い富士山。1990 年代には 3 階の部屋から見えたのだが、周りの家がみな3階建てになってしまい、今では 3 階の屋根の上に登らないと見えない。

そこで快晴だった 3 日の朝に富士山の写真を撮って、家族・友人に配信したところ、危険だからやめろというごうごうたる非難がかえってきた。確かに以前登った時、屋根材のスレートが霜で凍っていて、足を滑らし危うく落ちるところだった。年寄の冷や水と言われないように、慎もうと思った。

同じく 3 日の夕方、西武池袋線江古田駅の北側に隣接する浅間神社に富士塚に行こうと思いたった。正月なので登拝できると期待して行ったが、残念ながら登拝は 15 時で終了だった。看板によれば、江戸時代後期の築造で、高さ 8m、直径 30mで溶岩と様々な神仏・神獣の石像、石碑、灯篭などで飾られている。江戸八富士に数えられる比較的大規模なもので、国の重要文化財に指定されている。

これに調子を得て、他日長崎富士を探しに行った。私が住んでいる辺りは、江戸時代武蔵国豊島郡長崎村で厳密には江戸ではないが、長崎富士も江戸八富士の 1 つである。豊島区らしい住宅密集地の中の路地裏にある小さな公園に、富士のみは堂々と立ち上がっていた。

都会のわずかに覗いた青空を背景に、黒々とした溶岩を頂いて、本物の優美さと真逆で厳めしい。高さ 8m、直径 21m、溶岩流と化して今にも頭上に落ちてきそうだ。ここでも雑多というには恐れ多いが、50 を超える石造物群がトッピングされ、江戸の庶民信仰の厚さと奔放さ、そして切なる思いを感じるのだ。富士塚に何を求めたのか、素朴な信仰の痕跡は、大都会に変貌した町の片隅にしぶとく生き残っている。

ネットで調べたところ近所には中井富士というのがあった。中井御霊神社にあるようだが、子どものころからそのようなものを見た記憶がない。行ってみて捜したが、見当たらず、唯一狛犬の台座が溶岩で、これが富士塚の痕跡だろうか。夕方で、ちょうど神主さんが社殿の扉を閉じに来ていたので聞いてみると、富士塚はないと言う。そして、狛犬の台座は溶岩だけどと教えてくれた。

かなり大きくて強そうな狛犬が溶岩の高みに拠(よ)って、ふだんなら不届き者を威嚇しているのだろうが、今日に限っては早咲きの紅梅を愛でているようだった。

狛犬を惑わす梅の色香かな

無法の世界

まったくたまげたもんだ。世界一の権力者やっぱり無法者だった。トランプの出現によって法治主義の時代は終わった。無法者だと思われていたプーチンも一朝にして顔色なしだ。道理で彼らは馬が合うはずだ。これに加えて習近平も加えて三国志ではあるまいし、軍事力と無法の超ビッグ 3 がいつ世界三分の計を話し合ったのだろうか。

今、我々は歴史の転換点に立っている。これまでの古い枠組みは一気に流動化した。それをこの目で見ることができるとは、果たして幸せなのか、不幸なのか。確かに行き詰ったように見える民主主義や法治主義の殻を破るのは、こうした気違いじみた、いや気違いそのものでなければできない芸当だろう。こういう秩序を破壊する個体の出現は、留まるところを知らない急速な進化と膨張を遂げる人類に自己抑制を強いるものであって、生物種間のバランスを保つための必然、宇宙万物の法則の内なのかも知れない。人類に優る生物種が他になく、パンデミックも乗り越えてしまった今、自然生態系の調整機能が働いて、人類に内部崩壊を起こさせているのだ。

それはともかく、ここで切実な問題は、ビッグ 3 にとって自分を守る何の術もない我々庶民など眼中にないことだ。兵士とて単なる使い捨ての駒に過ぎない。すでにプーチンはウクライナ国民を虐殺したが、ロシア国民である多くの兵士たちを死地に駆り立てている。ト

ランプだって多少効率がいいだけで、兵士がましてや他国民が死ぬことに何の痛痒も感じていない。

馬鹿げたことに唯一の軍事的超大国がさらに軍備を拡張しようというのだから、その貪欲さも計り知れない。彼らが有する圧倒的な軍備、彼らはこれをしっかり使いこなし、コントロールしているつもりだろうが、決まって乱用・誤用されるのだ。故意や過失によって兵器は暴発し、それに対する報復で大戦に発展する可能性は非常に高い。そうなれば人類のみでなく地球上の多くの生物を道連れに滅亡するだろう。

トランプは同盟国の自治領であるグリーンランドも手に入れようとする。ロシアや中国が広大な氷雪に覆われたグリーンランドを占領して維持することなど不可能であるが、グリーンランドにロシア船や中国船が溢れているとアジれば、そう思えてくるから恐ろしい。とんでもない強権を手にした耄碌(もうろく)じいさんは、欲しいものを手に入れるためなら、どんな嘘でもつく。

さらにイランで起きている暴動に関与する姿勢を示し、シリアでも空爆を行っている。西半球に閉じ籠るつもりなどさらさらないようだ。支離滅裂である。せっかくロシアがウクライナで損耗し、中国が経済に行き詰って、アメリカの一人勝ちが明らかなのに、あちこちの瑣末(さまつ)な紛争にちょっかいを出せば、いずれは始末に負えなくなる。軍事介入という外交カードは、見せておくだけで切らないのが鉄則なのに、切りまくって喜んでいる。トランプの周囲には軍師がいないのか、自己の破滅は啓示されない。

1つだけ幸運があるとすれば、トランプの任期切れだ。彼が大統領でなくなって、後継者が大統領に当選しなければ、この流れは一旦途切れるかも知れない。しかし、無法者のトランプである。彼ならあらゆる法を無視して、大統領の座に居座り続ける可能性もある。もっともご老体だし、あの頑固さを見ればそう長くない気がする。

一番困るのは後継者が大統領になってトランプ路線を継承することだろう。トランプは唯一無二の存在だが、さすがに 2 代続いてあのような馬鹿げた能力を発揮するとは思えない。そうは言っても、トランプ路線が継承されれば、早晩人間世界の末路は決定的だ。

アメリカを唯一無二の超大国にしてしまったのが、人類の不幸なのだが、まあ最も民主的な国であり、人種の坩堝(るつぼ)と言われる国だから、世界・人類を代表する国と見ていいだろう。そのアメリカ国民が選んだ大統領が人類を滅ぼすのだから、止むを得ない仕儀である。

日本の生きる道

人類が滅亡して日本の生きる道もあったものではないが、何とかそれに抗う方策はないものか考えてみたい。

今のところトランプの眼中には日本はない。西半球にあるわけではないし、まったく従順な属国であるから問題にしていないのだろう。自民党政権が求心力を失いつつあるとは言え、与野党ともに外交方針に大差はなく、守ってやると言えば尻尾をふってついてくる。いや唯一それがトランプには気に入らないところだろう。彼が望むのは、アメリカの覇権を行使するための露払いとして日本を利用されることだ。アメリカにとって実質的に日本は属

国なのに、日本はアメリカの軍備にタダ乗りしているとアジって、さらに軍事費を負担させ、いずれは海外派兵の先兵に起用したいのだろう。

かと言って、日本の位置が軍事的に重要であることは論を待たない。逆に言えば、トランプが西半球に閉じこもるには、中国やロシアの太平洋進出を扼(やく)する日本があればこそだ。だからアメリカにとっては絶対手放せない要衝なのである。だのに日本の政治家は、アメリカ詣でをして、常に日本防衛のお墨付きをもらいに行く。江戸時代、将軍宣下(せんげ)の度ごとに諸大名が知行安堵状(ちぎょうあんどじょう)を押し頂いたように。

今こそトランプ得意のディールよろしく日本の戦略的価値を高く売りつけるべきである。駐留軍は実質的には占領軍で、ベネズエラの大統領より簡単に日本の首相を逮捕できるだろう。駐留軍に出て行けと言っても決して出ていかないのだから、もうちょっとアメリカに無理難題を主張してもいいのではないか。我が政権担当者は国民のために命を張って主張すべきである。

防衛費増額など自衛隊員の給料引き上げだけで十分だ。高くてくだらんおもちゃなど持っているだけで物騒だ。その金を教育に回して国民の文化水準を向上させ、文化の力で自国を防衛するような気概を見せるべきである。

戦争にも科学的根拠があるはずだ。仮に中国が日本への侵略を企てたとして、どれだけの航空機、艦船、兵器、人員、予算がいるのだろうか。そんな膨大な金をかけて結構なお得意さん・貿易相手を失うような暴挙をすれば、すぐに国が傾くだろう。日本の周囲の海を艦船で埋め尽くさない限り、日本攻略は不可能である。海に囲まれていることは何と有り難いことだろう。

同じことは台湾にも言える。狭いとは言え海峡を渡って台湾有事を起こせば、中国の国力が傾き、負担に耐えかね内政が混乱する。それをよく考えれば、台湾という踏み絵を踏み損ねて、ねちねちといじめられることもなかったのだ。事実上不可能に近い台湾有事などを荒立てるのは、アジテーションだ。国民の不安をかきたてるのではなく、そうならないような外交をすることが本筋なのに、仮想敵国をつくり戦前の政治をなぞるようなことをしている。もっと勉強して、国民のために命を張った外交をして欲しい。

話は変わるが、国連はまったく役に立たない。この辺はトランプと同意見。拒否権を持つ超大国が牛耳る世界平和などあり得ないのだから、こんな枠組みを突破して、並の国を結集した連合体を創造すべきだ。トランプが国連の諸機関から脱退したのを機会に新たな枠組みを模索すべきであり、日本が積極的に取り組むべきだ。アメリカと不仲になる必要はないが、小国は世界平和や共存のために、常にちょこちょこ動き回る外交努力をすべきだ。それが世界の真ん中で花咲くことだろう。トランプにぶら下がって、空母の上で跳ねて恥ずかしくないのだろうか。

ついでに言おう

レアアースが問題になっているが、よく聞けばとんでもない話だ。採掘はともかく精製過程で放射線物質などの有毒物質が出てくるようだ。その処理に膨大な経費がかかるので、中

国以外では低コストでの精製ができない。結局、中国の安い労働力といい加減な廃棄物処理・環境破壊におんぶしての科学技術の進化なのだ。臭いものに蓋をして平気で前に進む、まがいものの人類の進歩が世界の現実だ。偉そうにトランプがやっていることもこれと同じだ。反対勢力をモグラ叩きにして自分は気持ちがいいかも知れないが、いくら臭いものに蓋をしたところで、臭いは次々に立ち昇る。

レアアースなど糞喰らえだ。私みたいなじいさんには何の痛痒もない。スマホなんか無くてもよい。昔はそんなものなくても十分やっていけていた。確かに便利なものがなくなると東京のような大都市はやっていけないだろう。自然の法則からすれば、大都市こそ異常なのである。みんなで山に帰ろう。

まあ、最新兵器に不可欠なレアアースだけに、その争奪戦は果てしがない。永遠に世界平和は来ない。それが現実だ。不安定な釣り合いの上に見せかけの平和が成り立っている。最強の軍事力を行使したところで不可能なのだ。復讐の連鎖で、戦争はエスカレートするだけである。

ディールとやらで、世界の平和思想が駆逐された。考え見れば、商売上手な中国人とトランプは同質であり、仲が良いのも納得できる。中国人にタワマンやリゾート地の森林を売る手助けをしている日本の不動産業界、それに乗っかるゼネコンも同列の金の亡者だが。

中国は歴史的には、圧倒的な支配権をもつ皇帝が治めてきた国だが、大きいだけに庶民はそうした専権・強権を意に介さず自在に自己の利益を図ってきた。そうした遺伝子に染み付いた逞(たくま)しさが日本人と性格的に合わない部分である。しかし、中国にはそうした権力者を掣肘(せいちゅう)する思想も育った。儒学がその最たるもので、例えば王道と覇道がある。王道は仁徳による政道で、覇道は武力・権謀による政道だ。どちらがよいかは決まっている。若いアメリカにはそうした思想がないのだろうか。たぶんあるのだろうけど、それを熟成させるだけの時間がなかったのが、決定的に残念なところだ。

日本にあるのは何だろう。無常観だ、諦めだ。いつ沈没するかも知れない国土に暮らしている。自然の猛威には抗しがたい。いい加減なのだが、打たれ強いし、抵抗力もある。戦争だらけのこの世界で、トランプみたいな潔癖症にならずに、我慢しながらそこそこ生きていければ御(おん)の字だ。世界の真ん中で輝く必要もないし、そんな大それた能力もない。そこらのちっぽけな幸せを見つけて、のうのうと生きていこうではないか。

たてつづけのサプライズ

年明けからトランプが大暴れで、書きたくもない政治批判を書いていたら、今度は高市も一暴れ。支持率の高いことをいいことに、解散総選挙に打って出るという。政党政治の悪い面、国民の生活を置き去りにして、党利党略だけで動いている。自民党一党時代は終わりを告げて多党化・連立内閣の時代が到来した時代の趨勢を認識できず、自民党の良き時代に戻そうとする。結局、安倍政権の下での自民党一党支配が頂点を迎え、規律の緩んだ自民党・安倍派議員たち自身が金権政治に走って、内部崩壊して黄金時代を終焉に導いた。その反省

に立たず、何の改革も果たさないまま、懐古主義で安易に選挙によって政治の主導権を回復しようとしている。

戦前の政党政治が金権に染まり、軍部の若手士官による政治への介入願望から、独裁者もいないのに全体主義・軍国主義に突き進み、国を滅ぼしかかった反省などどこにもない。この国の人々には歴史という生きた手本に学ぶという精神がまるでないようだ。

高市が引き起こした徒波(あだなみ)に、多党化の波に埋没しそうになっていた瀕死の老舗野党の立憲民主党が、高市に軽視されて連立を離脱したものの若者の宗教離れでこれもジリ貧の公明党が合体して、中道改革連合なる新党が登場して、総選挙に臨むというサプライズが起きた。

それらに対するマスコミの報道は相変わらずつまらない。議員内閣制である限り、このような党利党略は当たり前のこと、大義などありはしないのだ。まあ、大した争点もないのに、何百億も選挙にかけるのは、このご時世でまともな行為とは言えない。衆議院解散が首相の専管事項であるなら、高市首相個人を相手に選挙費用の無駄使いについて損害賠償請求訴訟を起こす法的根拠はありそうだ。

政党の離合集散も政党政治では当たり前のこと。自民と維新が選挙で連立の支持を得たいというなら、立民と公明の合体も選挙で支持を得れば問題はない。選挙後にくっつけば裏切り行為と言われるだろう。そういう意味では、うまく解散に乗っかった機敏な対応だった。いや、急な解散が野党を追い込んだのだろう。解散がなければ合体話などなかなか煮え切らなかったに違いない。そういう意味では、高市は野党にとっては救世主であり、選挙に負ければ自ら墓穴を掘ったことになる。

とにかく、これで俄然選挙は面白くなってきた。どうせどっちに転んでも、このインフレは収まらないだろうし、トランプじいさんの魔球を打ち返す能力はないだろう。いささかヤケクソだが見ものである‼